

私とロシア、シベリア ～回想と随想～

吉田睦

1999年4月より25年間、千葉大学文学部日本文化学科、2016年より改組により人文学部日本・ユーラシア文化コースに所属し、学部教育に従事するとともに、大学院（人文社会科学研究所、2018年より人文公共学府）における大学院教育の一端にも関わってきた。ここでは、主として私が千葉大学に職を得る元になったこととしての私とロシア、シベリアとの関係とその後の推移について紙幅を頂いて記すこととしたい。

私とロシア・シベリア

私がシベリアという地域に関心を持つに至った発端のような出来事を、明確にこれとは記憶はしていない。ただ、中学・高校時代に、年甲斐もなく東北から北海道にかけての北日本という地域に対する強い関心を持つに至り、その中でそれが次第にさらに北方のシベリアにつながっていったというような流れであることは確かである。東北・北海道への関心というのはかなり単純な話で、当時（今流に言えば）「撮り鉄」で、当時まだ九州や東北・北海道を中心に残存していたSLを追いかけていたため、ということである。母親が九州、熊本の出身であることから、九州内のSLはかなり追いかけていたのであるが、東北や北海道もJRや一部私鉄のまだ多くの路線でSLの営業運転が行われていた。北海道に初めて行ったのは、中学2年生の終わる春休みのこと、昭和49年（1974年）の春であった。中学に今でいう「撮り鉄」友達が2人いて、その2人と行ったのが最初である。幸い自製の写真アルバムが残っているため、その時どこに行ったかは容易に知ることができる。その後SLは北海道からも姿を消すが、元々旅行好きだったこともあり、本土（内地）とは相当に異なる北海道の風土にすっかり魅了されてしまった。まだ札幌の時計台が林立するビルに囲まれる前の話であり、札幌駅が2階建ての小さな駅舎だったころのことである。その鉄道への関心がそこに留まらず、その向こうの世界、異世界に広がったことが、シベリアやロシアにつながった、ということではないかと思う。つまり北海道のさらに北方の世界である旧日本領の樺太、千島地域、あるいはそこからさらにつながるソ連の沿海州やカムチャッカなどにも関心が広がっていったのであった。

同時にその北方世界を包み込むような存在であるロシアにも関心が広がったという流れであったと思う。当時はまだソ連という国家が十分に健在な時世であり、欧米とは異なり、ロシアを中心とする諸共和国の集まりであるソ連を、我が国では専ら「ソ連」、と言って、欧米とは異なり「ロシア」、という言い方や認識はしていなかった時代である。サハリン、千島、沿海地方、極東、といっ

た地域はソ連の一部であり、ソ連を知らずして、あるいはソ連という枠組みでないと語ることは出来なかった。その流れでソ連について考えることになったものと思われる。

このように、ロシアやシベリアについて、自分の関心の中に現われてきたのは日本の北方、という所からであったかと思う。ロシアへのアプローチの通例としてのロシア文学とかロシア音楽、あるいは絵画芸術、はたまたソ連/社会主義政治といった入り口を経由したわけではなかった。自分の高校・大学時代である1970年代から1980年にかけてはソ連全盛時代であり、日本でもソ連の評価が分かれるところであった。同時にアフガニスタン侵攻（1979年；これにより1980年のモスクワオリンピックは多くの西側諸国が参加をボイコットした）、ポーランド危機（1980年代）、というように東西対立の厳しさを増していくような時代であった。私自身はというと、ロシア・シベリア・極東地域への関心が強まり、そこを訪問して実見してみたいという理由故に（節操のない）「親ソ派」となり、何かソ連側にもそれなりの言い分、主張、正当性があるのではないか、という思いで過ごしたのがこの時期であった。大学時代も極東・シベリア方面への関心が強まる中、在籍した京都大学文学部史学科地理専攻での卒業論文として、「帝政ロシアの極東経営」というような論題での論考の執筆に着手した。帝政時代、という時代設定は同時代の政治性などのややこしい点を避けるという視点もあったと思う。何よりも自分の知らない19-20世紀のこの地域の歴史やそれにかかわる地理的な動きを知っておこう、というのが（今になっていえば）一応の学術的な関心と言えると思う。その卒論自体は、諸資料からの孫引きの集大成であって、何か特別な論を展開したつもりもなく、実際その事実もなかった。地理学という学問分野には依然関心を持っていたが、上記のような理由で現実のロシア、ソ連社会を見てみたいという気持ちの強さ故に就職を考えるようになった。ソ連への勤務というようなことを想定すると、当時としてはマスコミ、商社などが主要な就職先であったが、金儲けをする商社にはあまり関心がなく、マスコミ方面を考えたかったが、ジャーナリスト自体は自分にはあまり向いていないような気もしていた。大学4年の時にマスコミ試験を受けることを伝えた地理学教室の（故）足利健亮先生から、「吉田君がジャーナリスト!？」とあからさまな疑義を呈されたことも良く覚えている。そのような漠然とした思いを抱く中で、中京区の下宿の隣室の立命館大法学部の学生Y君から、「おい、お前一等書記官になれ!」といきなり言われたことがあった。どのような経緯でその発言が出てきたのかよく覚えていないが、外務省には専門職員試験という枠組みがあり、それはいわゆる上級職試験とは別に設定された短大卒レベルの中級職の試験であったが、ロシア語を含む各種語学の専門官の募集という形の試験枠であることを教えてくれたのが彼であった。それは多分大学3年の秋か冬であったと思う。

それまで就職試験についてはあまり真剣に考えたこともなかったが、漠然と高校の教員試験（高校社会科の教職科目は履修していた）、マスコミ試験くらいは・・・とっていた時であった。それから半年程度で、その試験を受験する体制を整え、受験し合格するに至った。4年生の9月頃であ

っただろうか（因みに他に受けた教職試験やマスコミ試験はことごとく落ちた）。

地理学という専門分野から、公務員、しかも国家公務員という職業につくことはあまり想定していなかったこともあり、自分でも多少当惑するところはあった。同じ中京区の下宿にしばらくいた高校の同窓で京大文学部に一浪して入学してきたY君（後にNHK職員となって活躍した）からは、これまたあからさまに「お前、役人かよ！」と呆れられたことを良く覚えている。

大学を卒業した1981年春、ともかく就職しなければ生きていけない、という現実から外務省に入省するに至った。もちろん、「専門職員」というステータスでロシア語研修があり、その先に在外研修と称する語学留学というものを展望することができ、楽観的な日々を送っていたと回想する。ロシア語関係職員の在外研修は1982年7月から1984年6月までの2年間、モスクワ大学で受講した。当時モスクワ大学文学部に外国人コースがあり、そこ専門に教えている教員もいた。私と同期入省のロシア語研修のT氏は、2年間の在外研修のうち、1年間は英国、残りの1年間は私と同じモスクワ大学外国人コースで過ごした。私は早くモスクワでの研修を受けたいという一心で2年間のモスクワ研修を選択したが、結果的には英国で1年過ごしたT氏の方が正解であっただろう。そこで英語も一定程度マスターすることができたはずである。私はというと、ロシア語、というより当時のソ連事情・モスクワ事情には結構深入りできたが、英語使いということでは一人前にはなれず、その後ずっと英語に対し苦手意識をもって半生を送らざるを得なかったからである。

2年間のモスクワ生活はロシア語の習得という意味では大きな経験であったし、その間には旧ソ連国内の幾つかの地を旅行して、ソ連の多様性というものを知る機会にもなった。語学研修生のうちに色々なところを回った方が良く、というのが当時の大使館の上司の意見でもあった。キエフ、ヤルタ、レニングラード（当時）、バクー・エレバン・トビリシ、バツミ、ペトロザボーツク、アルハンゲリスク、ムルマンスク、イルクーツク、ビリュニス、カウナス、リガ、オデッサ等である。

コーカサス3国への旅行（往路はモスクワ～バクー間を鉄道利用）、バルト3国のうちの2国（リトアニア・ラトヴィア）訪問、バイカル湖を含めたイルクーツク方面の旅行（モスクワ～イルクーツク間はシベリア鉄道利用）等は今でも強く印象に残っている。

シベリア、というより極東への関心は学生時代よりずっと抱いてきたのであるが、自身が極東の沿海地方ナホトカ市の日本国総領事館勤務になることである程度決定的なものとなった。1984年8月から1986年8月までの2年間の勤務であった。沿海地方の首都はウラジオストクであったが、当時閉鎖都市であったため外国の領事館は設置できなかった。それで日本は近隣でかつ、日本との船舶による交通が可能であり、横浜との間に旅客船の定期航路のあったナホトカ市に総領事館を設置したのであった。（当時同市には他に北朝鮮の総領事館があった。しかし日朝間には国交がないため、領事館間での交流は一切なかった。）自分はというと、ナホトカ市では、先代の領事（M氏）の紹介で地元のダンススクールでの講習に参加したり、発表会に出演したり、という珍事もあったが、概

して比較的小さな地方小都市内でひっそり暮らしていた、というのが事実に近い表現であろう。当時領事館員にはソ連政府から行動制限が課され（日本側も相互主義の観点から在日ソ連大使館・領事館員には移動制限を課した）、同市の範囲でしか行動できない（市内にも立ち入り禁止区域があった）、ということもあった。もっとも何度かはその制限を破って（勿論ソ連側外交当局へ無通告で）近隣の湾に泳ぎに行ったり、電車で川遊びに出かけたり、という冒険譚もあったが。（これらの一部はソ連当局側には察知されていたと思われるが、外交ルートでの正式な抗議はなかった。）

ナホトカ市勤務の最大の利点を強いて見出そうとすれば、モスクワ以外の地方小都市での生活を経て、モスクワという首都のきわめて特殊な性格から脱却して、ロシアの一地方での生活体験をした、ということ、そして地方からロシア（ソ連）を見る視点を得た、ということであろうか。おそらく、その後私がシベリアの先住民研究に入ることでできた一つの契機にもなったかと思う。今思えばこのような客観的な分析も可能である。しかし他方で、領事館員、即ちディプロマートとしての各種特権の下に生活を維持していた、という側面も否定できない。食糧を中心とする物資の入手や、インターネットなどのない条件下で各種情報の入手には、外務本省との間の外交伝書使節や、貨物を運搬する日本船に依拠せざるを得ない状況であった。ナホトカ市内の店舗では、日本食はもちろんのこと、一般食料品でも入手が困難なものだらけであった。いわゆる国営商店では日本のレベルでの各種野菜・果物類にはついぞお目にかかることはなかった。天候不順の続いた2年目の夏前後にはニンジン数を数か月間市内で見ることがなかった。ある日領事館の近所でパイナップルの露店販売が行われていた。パイナップルはとても珍しく後にも先にもこの時見ただけだった。私は話のタネに一つ買って行こうと思い、売り子に一つ秤にかけてくれるように依頼したところ、「質が良くないので止めた方が良い」と言われて買わなかったことがあった。ベトナム産のパイナップルだったと記憶している。多少は食料として使えるものということでは、コルホーズ自由市場（ルイノク）に行く必要があった。領事館員は家族のためにも日本食を含め、必要な物資を常時日本から入手するのが常であった。外交官特権で日本の貨物船に物資の輸送を依頼するのであるが、発注を私の打つテレタイプ（アルファベットで鑽孔テープを打ってそれを送信する）で行うので、微妙な解釈のずれが生じることもあった。「Natto 10 ko」（納豆 10 個）（3 個一組のものを 10 個というようなつもり）と打ったのだが、納豆 10Kg まとめて段ボールに入ったものが届いたこともあった。なおソ連崩壊とともにウラジオストク市が対外開放されたため、1993 年日本国総領事館はナホトカ市からウラジオストクに移転している。

1986 年より 1992 年までは外務本省（うち 1989-1991 年は内閣官房に出向）勤務で、日ソ・日露漁業関係や航空関係に関する業務に従事した。日ソ漁業交渉は長引くことで知られ、水産庁の幹部や水産関係団体職員と共にモスクワに何週間も滞在したこともあった。また、サケ・マス孵化場建設支援の一環でサハリンを縦断する移動をしたこともあった。時に偶発的事象も担当したが、その

中では 1988 年 12 月発生のアルメニア地震の援助隊のメンバーとしての訪アルメニア、1991 年の人道支援ミッションでのシベリア（イルクーツク、ヤクーツク、ハバロフスク）滞在等があった。

1991 年 8 月のゴルバチョフ大統領拉致、その後の同年末のソ連邦解体という出来事は私自身にも少なからぬ影響を与えた。それは長年心の中に温めていた、ロシア、特にシベリアでの現地滞在や調査というのが可能になることを意味していることを認識するに至ったからである。その主要な関心は自分の大学学部時代の専門であった歴史地理学的なもので、特にシベリアへの移民の実態や生活、そしてシベリア少数民族の地理的世界観、といったものを漠然と研究する余地があるのではないか、という思いであった。その思いは、ロシアのシベリア・北米方面の歴史地理学研究者として知られていたロシア科学アカデミーロシア史研究所に在籍していた A.A.アレクセーエフ博士への同研究所での研究の可能性を模索する手紙とその彼から届いた査証発給の根拠となる招待状という形で現実のものになった。丁度エリツィン大統領が訪日するという話が出ていた 1992 年 8 月のことであったが、その訪日は唐突にキャンセルされた。それと同時に外務省退職願いをロシア課長宛に書面で提出し、事情の聴取を受けたが結局受理され、9 月に退職、11 月初めにはモスクワに赴いていた。この季節はモスクワも日没も早いこともあり暗い日が続くイメージであり、私自身も新たな道のりに期待を込めてというよりは、先の見えない暗中模索という心持で過ごした毎日であった。所属したロシア史研究所では、当初手紙を出した A.A.アレクセーエフ教授を指導教官としていたが、滞在半年余の 1993 年 5 月に同氏は逝去してしまった。そこで新たに指導教官としてシベリア史を専門とする N.I.ニキーチン氏を紹介された。若手といっても良い彼は私に「シベリア・オブラスニキ（シベリア地方主義者）」をテーマとするよう推薦して下さった。数か月その方面の研究を試みたが、自分としてはシベリア先住民研究を主体としたい希望が強くなり、所属研究所を変更することになった。1994 年 3 月には民族学・人類学研究所に所属変更をし、同研究所大学院課程に入学することになった。そこでの指導教官は Yu.B.シムチェンコ博士が指名された。彼はとても親身になって指導してくれ、自宅にも何度か招き入れて下さり、夫人で形質人類学者の G.I.アフナーシェヴァ女史と共に今後の調査の相談をする時間を過ごした。しかし乍らそのシムチェンコ氏が 1995 年 1 月に逝去されたのである。逝去される少し前に彼の自宅で「アツシ、日本から薬品を取り寄せられないかな」と相談されたのを思い出す。おそらくその時には自分の容態が危機的であることを知っていたのであろう。指導教官の度重なる逝去に暗澹たる思いをしながら過ごす日々であったが、1995 年 3 月には同研究所の若手研究員ユーラ（Yu.N.クヴァシニン氏）と共に、シムチェンコ氏から是非ここに行くように、と言われていた西シベリア、ヤマル・ネネツ自治管区のギダン半島を遊牧するネネツ人の所の調査に出かけることになった。彼のこの推薦がなければ、西シベリアの遊牧ネネツ人調査をすることはなかったかと思うと、彼の慧眼に頭が下がる思いである。同じヤマル・ネネツ自治管区のネネツ人でもヤマル半島側とギダン半島側ではいわゆる「文明」の浸透の度合いに差がある。

その「文明」の中には、天然ガス開発のような資源開発行為も含まれ、ガス田やそれに関連するインフラや港湾・鉄道の建設といった関連施設の建設の度合いに大きな差がある。私たちが推薦されたギダン半島側は当時まだ開発の波はほとんど及んでいなかった。地質学的調査のためのボーリング調査の櫓があちこちに立っている、ということはあったが。現在でも企業経営と個人経営者のトナカイ牧畜民の比率では、ヤマル半島側よりギダン半島側の方が個人経営者の比率はるかに高い。ヤマル・ネネツ自治管区での調査は私のネネツ人との最初の出会いであって、また彼らの住居である天幕小屋（ロシア語で「チュム）、ネネツ語で「ミャ」）に直接泊まり込んで行うスタイルの調査のはじまりでもあった。この調査旅行は、3月初めから4月中旬までの期間であった。その間に17か所の宿营地（キャンプ）を訪問、そこには合計50軒の天幕小屋（遊牧テント）があった。同行の若手研究員ユーラの研究テーマが親族関係調査ということもあり、各宿营地1~2泊という大変せわしない移動をしたのであった。この遊牧ネネツ人の調査を初めて行った調査旅行は、少人数で比較的長期にわたって遊牧生活者と起居を共にしたものであり、その全体が今でも強烈な体験として記憶に留められている。その中で今でも記憶の鮮明な一夜があった。それは、1995年3月末の一夜の出来事である。同行のロシア人学者と共に櫓に分乗してファクトリヤ（物資交易所）から出発して、近隣の宿营地に向けて数台の櫓で移動しているときのことである。私が乗った櫓は、飲酒をして泥酔するに至ったネネツ人御者のお陰で雪原に立ち往生してしまう。ところが私が櫓から立ち上がった際に、トナカイは泥酔状態のネネツ人を載せたまま出発してしまった。その結果私は雪原に翌朝まで一晩、一人で過ごす羽目になったのであった（泥酔した御者は、私が櫓から立ち上がってトナカイの索具の絡まりを直していた短い時間に、そのまま櫓と共にトナカイが運び去ってしまった）。後で聞くと、オオカミも遊弋するツンドラで、良く無事にすごした、ということになる。この夜、21時頃から2時間ほどの間に見たオーロラが、これまでの人生で見た最大かつ荘厳なものであったことは皮肉である（このことはナウカ書店発行の雑誌『窓』125号（2003年7月）に少しばかり書いているのでそちらに譲りたい）。

この時の調査は「食文化」という課題を背負っていたが、各宿营地1~2泊の滞在ではなかなか彼らの食の実態調査というところまでは至らなかった。各家庭で供される食事の内容を記録するのに精一杯で、なかなかネネツ人に質問して様々な情報を得る、というような余裕がほとんどなかったと記憶している。そこはその後文献等で補足することになった。

それでも、家畜トナカイ肉を大方茹でて食に供することや、冬でも氷下漁労で漁獲したサケ科シロマス（コレゴヌス）属の魚類や罌猟で捕獲したライチョウ、ユキウサギ、散弾銃で捕獲したガン・カモ類等を適宜食に供する、というようなパターンを観察することができた。トナカイ牧畜民=家畜トナカイの肉を食べ続ける、というイメージからの脱却である。このことは、その後の調査でも確認されることになった。今思えば、1995年当時はまだソ連期の影響が全ての面で大きく、ファク

トーリヤ（物資交易所）や集落の商店の品揃えや売り子の態度などは、ソ連時代のものが踏襲されていたのは、他の行政サービス部門と一緒にだった。

モスクワのロシア科学アカデミー民族学・人類学研究所大学院生時代には、この後も 1996 年 6～7 月、1997 年 12～1998 年 1 月にも同じヤマル・ネネツ自治管区ターズ地区のツンドラ・ネネツ人の調査を引き続き行い、研究情報を蓄積することができた。大学院の指導教員は逝去した Yu.B. シムチェンコ博士から西シベリアのハンティ・マンシ人の専門家 Z.P. ソコロヴァ博士に変更になった。

因みに 1995 年と 1996 年のネネツ人調査とその前に実施したサハ共和国での 1993 年 7～8 月、1994 年 3 月、1994 年 7～8 月の調査も併せて、1997 年 3 月に博士論文（ロシアでは博士候補論文＝Ph.D 論文）の提出をし、同年 9 月に学位を授与された。その時の論題は「ギダン・ネネツ人の食文化（解釈と適応）」というものであった。同年秋にはその論文に若干の修正をほどこしたものが民族学・人類学研究所出版局より出版されるに至り¹、そのことはかなりラッキーなことであった。ついでに言うと、その出版とほぼ同時に、シベリア・ネネツ人の過去の名称「ユラク」について、文献資料を探って書いた論考「ギダン・ネネツ人の祖先の探求～文献資料に基づく考察～」があり、それも論集『シベリア民族誌論集』の中に掲載された²。このあたりは全て指導教員のソコロヴァ先生の判断と権限で行ったものと思う。（出版の少し前に、ソコロヴァ先生が私のすぐ横で、同論考について同僚のユーラ（Yu. クヴァシニン）に「この論文の出来はどう？」と尋ねたところ、ユーラが「文句なく良い」と答えていたのを思い出す）。³この時の出版経緯を思い出すたびに、指導教員のソコロヴァ先生にはその適切な指導とともに終始お世話になりっぱなしであった。

論文を書いたのは良いが、どこかに仕事を探さないといけない、ということになり、大学の公募なども参照するようになった。また調査でお世話になった日本人研究者からも就職先の情報を提供していただいたこともある。公募情報では、北海道のとある私立大学に一つロシア語関係のものがあり、そこに応募し決まる寸前までいったが、その時点で現在の職場の採用情報が入り、（当時のユーラシア言語文化論講座の）先生方のご配慮により、1998 年中には 1999 年 4 月からの採用が決定した。業績がほとんど僅かしかなかった私であるが、上記の博論の出版物がその時点で既に刊行さ

¹ А. Ёсида, *Культура питания гыданских ненцев – интерпретация и социальная адаптация*. Москва: Институт этнологии и антропологии. 1997

² А. Ёсида, «В поисках гыданских ненцев – по литературным источникам» В кн.: Народы Сибири Кн.3 (Сибирский этнографический сборник 8) Москва: Институт этнологии и антропологии. 1997. Стр. 140-170.

³ この論考に当初付けた表題は「ユラクって誰？ギダン・ネネツ人の～」と続けたものであったが、指導教員のソコロヴァ先生は最初の一文を削除してしまった。おそらくユラクについて適切な研究内容になっているかどうか半信半疑だったのかと推察する。そのためこの論考を「ユラク」という用語で検索できなくなってしまったのは残念である。

れていたことは幸運なことであつたに違いない。出版に至る経緯は実は私自身あまり関与しておらず、詳しいことは聞いていないのであるが、ソコロヴァ先生の推薦（あるいはもっと強い形で）により実現したものであると確信している。

* * *

少しばかりくどくなつたが、以上が千葉大学への就職に至るまでの経緯というものである。1999年4月より25年間の千葉大学在勤ということになった。この間のことを時系列で書き続けることは、読者を辟易させるであろうし、私自身あまり記憶も定かではないことも多いことから断念して、幾つかの点にまとめて記したい。

研究（大学就職後）

シベリア先住民（トナカイ牧畜民）文化研究

千葉大学就職後もロシア、シベリアへの調査を継続し、2001年10～11月、2005年3月～5月とツンドラ・ネネツ人のトナカイ牧畜民調査を行っている。また2008年3月には、ヤマル・ネネツ自治管区プール地区で森林ネネツ人の調査を実施している。2001年から2005年の間には4年ほどのブランクがあるのは、少しばかり理由がある。2001年の調査時にはあまり事前の時間的余裕がなかったことから、現地（ロシアの法律でいう「国境地帯」と含む）への入域に関しての十分な許可手続きを経ることなく調査を実施したことになってしまったことである。行政府や先住少数民族局の人々も黙認する形で調査を実施したが、後になってその事実が関係官庁に伝わることになり、ロシア自体への入国査証の発給がなされなくなってしまったためである（このことは推測であり、正式に理由を得たわけではない）。2005年に入国できるようになったのも、特に理由は把握していない。査証の発給を申請したら、発給された、ということである。

しかしその後はやはり私個人というより、外国人研究者が入域すること自体が困難になり、申請が通らなかつたり、審査に時間がかかる、というような状況が頻発してきた。2008年の森林ネネツ人の調査地であるヤマル・ネネツ自治管区プール地区は国境地帯ではないので、査証の発給がなされたのかもしれない。そのこともあり、またその後京都の総合地球環境学研究所（通称「地球研」）のプロジェクト（温暖化するシベリアの自然と人—水環境をはじめとする陸域生態系変化への社会の適応—〔研究代表者：檜山哲也〕）に参加させてもらい、主としてサハ共和国の調査に加わるようになったため、西シベリアからは少し離れることになった。

こうして同プロジェクトの枠内で2009年8～9月には、サハ共和国コビヤイ地区セビヤン・キュヨリ村でのエヴェン人のトナカイ牧畜企業（旧国営企業）での調査を実施した。宿営地にはトラック「ウラル」で数時間かけて道なき山間部、一部は単なる川を進んでキャンプ地に辿り着いた。そこでは公営企業の1500頭ほどの大きなトナカイ群の放牧を観察することができた。帰途、セビヤ

ン・キュヨリ村までも同様にトラックの移動であったが、これは無事であった。しかしそのセビヤン・キュヨリ村から首都ヤクーツク市に戻るのに、鉾山集落に行かないとフライトがない、という情報があり、その鉾山集落までの 50~60 km の道のりを、やはり同じトラックで途中バンクやエンジンの過熱等も含め一晩かけて移動する、ということもあった。その鉾山集落からヤクーツク市までの航路による移動は、AN 2 という定員 12 名程度の小型複葉機であった。この機材には 1993 年のサハ共和国での調査時と 1998 年のヤマル・ネネツ自治管区での調査時にも世話になったことがあるおなじみの小型飛行機 A H-2 であった。

同プロジェクトではその後、2010 年 8 月と 2013 年 2~3 月の 2 回、サハ共和国オレニョク・エヴェンキ自治区でのエヴェンキ人トナカイ牧畜民調査を実施している。2010 年の夏季の調査では、獣医と共に 2 か所のトナカイ群（ブリガーダ＝労働班）を訪問するために騎乗トナカイでの移動が数十キロにわたりあり、2 回「落鹿」したこともある。1 回目は岩と岩の間で救われたが、2 回目は湿地だったため身体の半分が水没した。

2013 年 2~3 月は厳冬期でもあり、最低マイナス 47 度の宿営地での調査は過酷でもあった。しかしトナカイ牧畜民は日夜屋外で様々な作業に従事しているのであった。この時はブリガーダ間の移動を凍結河川上、スノーモービルで行うことになった。河川上で立ち往生して小一時間徒歩での移動もあり、また移動中、反動で勢いのついた木の枝の直撃で目の附近を強打したり、ということもあった。西シベリアのツンドラ・ネネツ人のところでもいくつかのエピソードはあったが、サハ共和国でもそれなりのエピソードがあるものである。しかしヤマル・ネネツ自治管区におけるツンドラ置き去り事件ほどの生死にかかわるようなことはサハではなかったのは幸いであった。

このようにサハ共和国にシフトしていた調査地であるが、2014 年に平田昌弘氏（帯広畜産大学）の科研プロジェクト「乳文化の視座からの牧畜論考—全地球的地域間比較による新しい牧畜論の創生」（2014-2019）にお呼び頂いたことで、またネネツ人牧畜民の調査への途が開けてきた。2015 年度は在外研究の機会が訪れ、英国ケンブリッジ大学のスコット極地研究所に 1 年間在籍させていただくことになった。その関係もあり、同プロジェクトには半身のような形でしか参画出来なかったのは心残りであった。しかしケンブリッジより帰国した 2016 年には、ケンブリッジで再開したネネツ人トナカイ牧畜研究者の F.スタムラー氏（本来はドイツ語でシュタムラーというべきだが、皆英語読みでこのように書いている）の助言もあり、ビザ申請を前もって行うことで同年 8-9 月のツンドラ・ネネツ人調査が可能となった。その時には、かつて 1995 年の初めてのツンドラ・ネネツ人トナカイ牧畜民調査時にターゾフスキー集落の宿泊所の部屋で相部屋となって知り合ったロマン・ヤンド氏がアンチパユタ集落のトナカイ牧畜公営企業「アンチパユタ・ソフホーズ」所長として働いていたこともあり、彼の導きで同企業の一ブリゲイドである第 5 ブリゲイドに約 1 週間の参与観察が可能となった。同ブリゲイドの所在地はギダン半島の西南端で、約 3 千頭を要する。この年 8 月

は折悪しく 40 年間発生を見なかった家畜伝染病である炭疽がヤマル半島側で発生、家畜トナカイ 2,500 頭が斃死した他、遊牧民にも感染し、10 代の男性がチュメニで死去している。その直後の訪問であった。私が第 5 ブリゲイドのキャンプに入る際のヘリコプターにはチュメニからトナカイに炭疽の予防接種をするために来訪した獣医チームが搭乗していた。到着後数日はそのブリゲイドを含め周囲のトナカイ牧畜民のキャンプを訪れ、予防接種を行っていた。遊牧民も予防接種が済んでいて、その界限で予防接種をしていないのは、人も家畜（トナカイ）も含めて私だけ、という不吉な状況下の調査であった。その時の調査の最大のポイントは、ツンドラ・ネネツ人のトナカイ牧畜民の許での初めての公営企業（ソフホーズ=つまりソヴィエト型国営農場という名称はとっくに存在しないはずのものであるが、何か固有名詞のように使われている名称であった）であることだった。つまり 1995 年以降、5 回の参与観察調査時は全てチャスニキと呼ばれる個人経営者のトナカイ牧畜民の許での調査であったからである。公営企業の一ブリゲイドということで、群の規模も大きく（3 千頭程度）、また経済的状况にも余裕が見えた。ヘリコプターが時折来訪するため、小麦粉やパンなど移入食糧を中心に物資を供給してもらえるのが一番大きいのではないと思われた。個人経営者は自分の飼育する家畜トナカイの屠体を販売・換金して必需品を入手するしか方途はなかったからである。その対比に半ば感心していた中で、選挙投票用のヘリコプターが突如飛来し、囮らでも 8 日程度の滞在でまたアンチパユタ集落に戻るようになったのであった。それがネネツ人トナカイ牧畜民の許での最後の調査になっている。

氷下漁撈研究

氷下（こおりした）漁撈（ないしは漁業）という漁法が存在することを初めて知ったのは、1995 年 3-4 月ロシア・西シベリアのツンドラ・ネネツ人トナカイ牧畜民の許での調査時であった。冬季 3 月の調査時に冷凍の魚が食卓に出され、その魚の漁獲法として知ったのが最初である。その漁法を実際に目にすることになったのは 1997 年 12 月のことであった。1996 年夏にもツンドラ・ネネツ人の調査を行っているが、その際は夏の漁撈であり、氷下漁撈ではなかった。氷に穴を複数開けて、そこから刺網を通し入れ設置、翌日以降漁獲をチェックしに訪れる、という方法で、刺網に引っかかった魚を漁獲するという漁法である。漁獲はほとんどがシロマス（コレゴヌス）属の魚（英語で whitefish）で、それらはツンドラ・ネネツ人の直接食用になる有用魚である。かれらはそれを夏も冬もまず刺身で食べ、残りは専ら茹でて食べる、という方法で摂取していた。夏季には余剰の漁獲は天日干しの魚に加工されていた。一部の魚は開きにされて塩蔵し、近くの物資交換所に持ち込んで換金されていたようである。自家食糧用には、天日干しか、頭と内臓を除去したドレス状態で冷凍保存したものであった。ネネツ人の許での氷下漁撈を目にして以降、ほどなくして冬季の氷上で行う漁法は、学生時代に目を通したことのある菅江真澄の八郎湯での漁撈活動の記録にあることを

思い出していた。また、菅江自身が残しているスケッチを集めた図集に八郎潟での氷下漁の風景の絵図が残されている。⁴日本語で氷下（こおりした）漁撈ないし氷上漁法などという名称があることもその時以降になって知ることになった。氷下漁撈については『千葉大学文学部人文研究』という文学部紀要に我が国における氷下漁撈についての拙論が収められているのでそちらに詳細は譲りたい。⁵

我が国の先行研究では、氷下漁撈にはいくつかの漁法があることも知ることができた。つまり、ネ Nets 人遊牧民の許で行われている刺網の他に、曳網、定置網等もいくつかの種類存在することが分かった。その多くは歴史的なもので、結氷することが短期間になった長野県諏訪湖、干拓されてしまった秋田県八郎潟、やはり凍結期間が短くなった青森県小川原湖や十三湖といった場所でののかつての漁法としてのものであった。しかし、北海道の網走湖、能取湖、サロマ湖、そして阿寒湖の場合は現在でも毎年実施されている漁法であることも知ることができた。特に網走湖では氷下引き網漁業が産業的に実施されている日本で唯一とも言って良い場所であることを知った。そこで網走湖での氷下漁業を調査することを旨として、管轄の西網走漁協に調査の申し入れを行い、快諾して頂いた。

そこで科研費を申請、2013-2016 年間の研究機関でのプロジェクト「気候変動条件下における氷下漁の環境文化論的研究」を実施することができた。その間、網走湖での氷下曳網漁、能取湖での氷下刺網漁、サロマ湖での氷下待網漁（ふくべ網漁）、そして阿寒湖での氷下曳網漁を実見し、参与観察、聞き取り等の調査を実施することができた。この他にもかつての実施地である諏訪湖（諏訪湖漁協、下諏訪博物館）、八郎潟（八郎潟漁協）、小川原湖（小川原湖漁協）も訪問し、最近の状況についても関係者より聴取することができた。それらの成果の一部は公刊されているので、詳細はそちらに譲りたい。網走湖は毎年 1-3 月の間には氷上作業を行うのに十分な氷結と氷厚があり、年により長短はあるが氷下曳網漁による漁獲が一定の成果を上げてきた。しかし気象条件の他にも主要漁獲対象であるワカサギの資源量や生態にも左右される要素があり、漁獲量は安定しているとは言えない状況である。とはいえここでは氷下曳網漁が漁協の指導や管理活動の下で、地域産業の一角を構成しているという意味で、本邦で稀有なケースということができる。また氷下刺網漁の行われている能取湖（クロガレイが主要な漁獲であった）、氷下待網漁のサロマ湖（ワカサギに近いチ

⁴ 菅江真澄『菅江真澄遊覧記』平凡社（東洋文庫 119）1968；内田ハチ編『菅江真澄民俗図絵』（上）（中）（下）岩崎美術社 1989

⁵ 吉田睦 2015 「本邦における氷下（こおりした）漁撈（概論）」『人文研究』（千葉大学文学部紀要）44:135-173. 吉田睦 2018 「網走湖とその周辺における氷下漁：環境依存型漁獲活動としての考察」『北海道立北方民族博物館研究紀要』27:1-14

カヤクロカレイが漁獲対象)なども寒冷条件を有効化した地域産業の一角を構成している。この他に北海道では根室・釧路方面の風連湖等でも氷下漁(待網漁が主体)が気象条件に左右されつつも行われていると聞いており、総合的な視点からの調査は待たれるところであろう。

教育・研究

後半になってしまったが、千葉大学での教育活動について少しだけ述べておこう。教育活動は千葉大学での25年間の中でも最も時間を費やしたし、それへのエネルギーも長時間投入した、という意味では最大の職務であった。文学部の中で所属したのが当初の名称「日本文学学科」、2016年より形式的な改組により「日本・ユーラシア文化コース」であり、常に日本語日本文学という研究分野との共存というある意味では異質な教育環境であった。その名称の窓口で入学してくる学生の2/3くらいは日本文学や日本語学を目指す学生であり、文化人類学、民俗学といった専門領域、つまりフィールド調査を研究方法として採用してそれを遂行しようという気概を持った学生は極めて少ないまま推移した25年間と言っても過言ではなかった。この点が千葉大学文学部での職務上の最もネックともいえる点であったと言えよう。そのことは本学部での教育活動へのスタンスに影響があったことは否定できない。期間中にいくつか改組計画が提起されたことがあり、特に行動科学の文化人類学や社会学との合流ないし新規講座構成といった話が出たこともあったが、ほとんど入り口での議論に終わり、話はそれ以上進まなかった。大学教員というのは、外の世界からみると進歩的、革新的な人が多い、と私自身もそのように確信していたが、それが迷信だったことも早くから経験した。学部改組への無関心、あるいは既存の体制への固執、革新的構造改革への抵抗といった現象は予期できなかった。結局学科制からコース制へ移行した際も従来の4学科がそのまま名称をコースとしたたけの話であったことには幻滅の一言に尽きた。

それにもかかわらず、一部の学生は移動生活者とか、牧畜民とか、食生活の多様化とか、食の地域性や嗜好の問題等に関心を寄せて卒業研究のテーマにしたことで、かろうじて存在の意義を感じたことも少なくなかった。この間、私が指導教員として直接卒論指導した学生は概数で70名くらいである。その多くは食文化関連のものであり、海外の諸民族文化を扱ったものは内陸アジア方面とロシア方面の数例で、それらも食文化関連の論考が多かった。大学院も当初より修士課程を担当、途中より博士後期課程も担当したが、直接の指導学生は修士課程(博士前期課程)の数名のみであった。M君の韓国の味噌文化と我が国の中京地方に展開する豆味噌文化圏との関連を扱った論考、O君のカザフ人牧畜文化を扱った論考、そして荻原真子先生の積み残しのSさんのアイヌ人シャマニズム研究、そして中国側のエヴェンキ人の食文化研究をした中国からの留学生(エヴェンキ人)Mさんの論考がそれである。後期課程の学生は結局一人も指導教員として直接指導をする学生は出現しないままに終わってしまった。

とはいえ特に大学院生は副指導教員として幾人かの指導教員と共に研究に関与する機会があり、印象に残っている学生も少なくない。日本人ではユニークなデータに基づくアイヌ語研究の博論で学長賞を授与された深澤さん、修士課程より在籍し現地調査を重ねながら大好きなモンゴル・カザフ人文化に関する博論を書き上げた廣田さん、中国系モンゴル人学生では、薬草研究のバヤリタさん、ラクダ牧畜研究のソロンガさん、モンゴル人歌舞団の活動の歴史の変遷を研究したアラタンバガナさん、内モンゴルの灌漑や水資源と牧畜の関係を研究するウニバトさん（在学中）他である。

学部卒業論文では、ロシアを扱った論考も数名（戸田村の白露交流、ロシア音楽研究等）いたが、ほとんどは食文化研究をテーマにするもので、シベリア方面の民族学・人類学系のテーマを扱う卒業研究はほとんどなかったのが残念と言える。がそれはひとえに自分の力量と度量の狭さに起因するものであろうから、悔やんでも仕方のないことではあるが。

* * *

次に二点だけ、最近の情勢に関することを記すことをお許し願いたい。一つは新型コロナウイルス禍（以下コロナ禍）によること、そしてもう一つはロシアによるウクライナ軍事侵攻（以下ウクライナ情勢）の二点である。

コロナ禍は中国からの観光客の動静や客船内の感染者から報道が始まったことはもうだいぶ昔のことのように思える。4年前の2020年1月のことである。それ以降退職までその感染症対応に追われることになるとは当時予想もできなかった。当初は致死率も高く、連日死者数の報道があり、それも少なくない数であった。俳優や芸人の逝去の報道が続いた。私のロシア・西シベリアの調査地ヤマル・ネネツ自治管区における知人O氏も2020年12月にコロナ禍で亡くなった。数週間前までFacebookのページを更新していた彼は、突如鼻にチューブを通した画像を投稿し驚いている間もなく、逝去の報に接した。大柄で気の良い男性であったが、その後ロシアに行けていないので今でも信じられないことである。確か再婚で、ギダン半島の調査地から定期船でサレハルド河港に帰還した際、車で出迎えてくれた時に奥さんと二人の小学生の娘さんが同乗していたのを思い出す。幸いその彼を除けば、私自身の周辺ではコロナ禍で命を落とした人はいなかったのが幸いである。しかしコロナ禍の下にあって、大学としての教育的対応により、授業方法、カリキュラム、会議等のオンライン化で相当な労力と発想の転換を求められた。初年度（2020年度）のオンライン授業はほとんどがオンデマンド型でパワーポイントを使った授業を作成、それをさらに動画化（mp4）する、そしてそれを大学内の指定サイトにアップロードする、という一連の作業を自宅で終えて就寝できるのが夜半の2時前後という日が続いた。サイトでは欧州方面、特に西ヨーロッパ諸国の感染者数が大きく、連日それらのサイト情報をフォローする毎日であった。

そのコロナ禍も今や第9派の只中なのかももう終息してきているのか分からない。変異ウイルスの名称ももはやフォローしきれていない。来春の退職時までこれが続いているのかどうかといったと

ころで、もはやあまり関心呼び起こさない状況である。現在は通常の(?)インフルエンザの流行が危惧されているということで、もはや新型コロナに罹るのか、インフルエンザなのか、どうでも良くなってすらいる。このままコロナ禍という災難の渦中に職業生活が終わるのか、という悄然とした気持ちで過ごす毎日である。

ところが昨年2月よりそれに追い打ちをかける事態が発生して、これも解決、終息の見通しもない。つまりロシアによるウクライナ軍事侵攻である。この出来事自体がロシアによる愚行・蛮行であることに何らの疑いもないことであるが、このことについては専門とするロシアに関することであるため、何か記すとしたらより高度な分析や情勢把握をしたうえで、ということにしたい。ここではその余裕もないので雑感を記すに留めたい。

ロシアはすでに2014年にウクライナ領のクリミアに軍事侵攻し、ほぼ無抵抗状態で占領し統治を既成事実化して推移してきた。ウクライナ側がそれに対して軍事的抵抗を示さなかったのは、そのような動きを事前に把握できずその余裕がなかったということに尽きるのかもしれない。しかし第2次世界大戦後に維持されてきた国際秩序を根本から乱すこのようなロシアによる愚行・蛮行に対して、国際機関(国連等)は何ら有効な対応をして来られなかった。その延長としての今回の軍事侵攻があるが、国際的な世論は別として、依然として有効、有意味、有意義な対応をする国際的紛争解決機構というものが存在していないという事実をつき付きられている状態が続いている。

さらに先月(10月)から発生している中東、イスラエル・ガザ地区における軍事行動が途方もない国際情勢の不安定化に拍車をかけて今日を迎えている。「私とロシア、シベリア」と題する小文の内容がくずれてきてしまったが、現在、そのような情勢下であって、ロシアにも行く手段も方途もほとんどない状態であり、ましてやシベリアで何らかの調査でもしようという状況では全くない。しかも、ウクライナ方面で従軍している民族の中でも、トゥバ人やブリヤート人の比率が異常に高い、というデータがあり、シベリアがこのような形で関与させられている、ということに強い憤りを感じる。囚人の動員ということでも、ヤマル・ネネツ自治管区からの囚人の派遣者の中にネネツ人が少なからずいる、という報道もあった。これが21世紀の現実と思うと暗澹たる気持ちであり、そのような中で職業生活を終息させることになるのは残念の一語に尽きる。

少し話は変わるが、ロシアのウクライナへの侵攻開始直後は、戦争への抗議行動を行うロシア市民の映像が頻繁に流されていた。時間が経過するにつれてそれが減って行ったことは、当局の取り締まりが厳しくなったためであると推測する。私の知人のロシア人畜産学者もFacebook等のSNSにしばしば反戦意見を表明したりしていたが、ある時軍に対する名誉棄損の廉でサンクト・ペテルブルグの地区裁判所から罰金命令を受けたとして、その裁判所の決定文書をFacebookにアップしていた。それは2023年2月のことであったが、彼はその後もFacebookを含め反権力、反戦の内容のコメントを、頻度はぐっと低くなったとはいえ止めていない。ロシアにもそのような知識人がいる

ことを裏付ける情報に接するのは頼もしいことである。

これに関連して思い出すことがある。1968年8月にチェコスロバキアの民主化が、ソ連を首班とするワルシャワ条約機構軍の軍事介入で潰された、いわゆるチェコ事件が勃発した。それに反対を表明したソ連市民8人が、赤の広場のローブノエ・メストでデモンストレーションを行ったのが同年8月25日であった。⁶自分は当時はまだ10才で、チェコ事件の深刻さは当時全く自覚してはいなかった。しかし後にこのデモンストレーションのことをクローズアップするNHKの番組「私は臆病者～ロシア人の“プラハの春”～」(2004年2月BS)⁷が放映され、なおかつそれを録画していて、

⁶当時の様子を邦語図書から断片的に引用する：時計が12の鐘を打ち始めた。ボゴラズたちは、聖ワシーリー寺院の前にある帝政時代の処刑場・布告場、ローブノエ・メストに座って、静かにプラカードを広げた。ボゴラズが持っていたのは、・・・「自由と独立チェコスロヴァキア万歳！」と書かれたプラカードだった。左隣に座ったゴルバネフスカヤは、ボゴラズが黒い尖った文字で「チェコスロヴァキアから手を放せ！」と書かれた白い布を持っていたと証言する。・・・ゴルバネフスカヤは、手製のチェコスロヴァキア国旗を持っていた。「あなたと私たちの自由のために」というスローガンは、彼女がパーヴェル(リトヴィノフ=引用者注)に渡した。

すぐに十人ほどのKGBの私服監視員たちが走り寄ってきた。そして、・・・座っているデモンストレーションの参加者たちに殴り掛かった。(米田剛路『モスクワの孤独～「雪どけ」からプーチン時代のインテリゲンツィヤ』現代書館2010。330-331頁)(ボゴラズ、ゴルバネフスカヤ、リトヴィノフはデモンストレーション参加者)

⁷「私は臆病者～ロシア人の“プラハの春”～」の番組案内文：(詩人・シンガーソングライターのユーリイ)「圧倒的な武力を持っているからといって、他国に侵略していいのか」絶対的な戦力の違いの中で終結に至ったイラク戦争。世界の構造が起こした新しい戦争は、国家と個人の根源的な問題を突きつけた。その問題にどう対じし、個人はどうふるまうべきか、そのことを考えつづけてきた人たちがいる。ロシアの詩人、ユーリ・キムが、2003年夏、旧友を訪ねて旅立つ。一篇の詩「臆病者」を携えて。そこにはこう書かれている。

「臆病であればすべてが保証される。誰もおまえを捕らえにこない。正当化も言い訳もできない。子供たちに馬鹿にされても仕方がない」

キムは35年前、ひそかに反ソビエト体制を語り合う知識人の輪の中にいた。そのとき、プラハの春をじゅうりんするソビエト軍のチェコ侵攻が、プラハの地下放送によって伝えられる。知識人たちはひとりひとり悩み考える。そして8人が1968年8月25日、赤の広場にプラカードを持って立ち、抗議の意思を表明する。しかし多くはそれに参加せず沈黙を守った。ある人は、無駄な抵抗だと思い、ある人は家族に引き止められた。キムも参加を思いとどまる。それぞれの選択は、その後の人生を分けた。

赤の広場に立った8人は5分後に逮捕され、家族と離されて、シベリアへ送られる。彼らの名誉は今もって回復されず、知識階級としての立場を永遠に失った。一方参加しなかった人たちは、それまでどおり、大学などでの教職を確保し、やがて、社会主義崩壊のときには全面に立つ。

キムは参加しなかった自分とのかっとうを続け、やがてみずからを臆病者と断じる。プラハの春

ロシア語学習者に授業の一環として視聴させていたことで、さらに身近なこととして受け止めてきた。2018年8月にこのデモンストレーション50周年を記念する小さなイベントがモスクワでひっそり行われたと伝えられるが、その約3年半後の2022年2月になってロシア単独によるウクライナへの軍事侵攻という蛮行が敢行された。これはその伏線である2014年のロシアによるクリミアの不法占領があり、ウクライナをロシアと歴史的に不可分の一体とする「プーチン論文」が公表されたり、という予兆があったにせよ、思いもよらない出来事であった。しかし現在目の前に展開していることは悪夢と片付けることにできない、国際紛争の現実である。因みにそのチェコ事件に反対を表明するデモンストレーションが行われた赤の広場の一角、ロープノエ・メストでは、歴史的に政治的な示威行為が行われてきた場所として知られている。実は2010年10月にモスクワを訪問していた際、私自身偶然この場で一人のロシア人（と思われる）女性が「大統領は辞任せよ！ロシア政府は・・・」と書いた紙を掲げたのを目撃した。数分後には警官が現れ、暫しのもみ合いとなったが、警官たちはほどなくして駆けつけたパトカーに女性を押し込んで走り去っていった（手持ちのデジカメで写真と動画に収めている）。ロシア市民がチェコ事件への反対表明をするこのインシデントは、ウクライナ軍事侵攻への抗議行動の映像を見中でありありと思い出すことになった。この女性のその後の運命はどうなっているだろうか。

* * *

最後に、本年2023年9月に逝去された元名古屋市立大学教授齋藤晨二先生のご冥福をお祈りいたします。齋藤先生は私が学部時代を過ごした京都大学文学部地理学教室の大先輩でもある。先生は旧ソ連時代よりシベリアや中国西北部の方面の地理・民族に関する研究・教育者として活躍されたが、特にソ連崩壊後の1990年代後半より、ロシアでのフィールド調査の壁に穴を開け、現在のロシアにおける民族学・人類学調査の先駆者としての役割を果たした。その成果である2部の科研費報告書『シベリアへのまなざし』（1999）『シベリアへのまなざしⅡ』（2001）は、先生のご承認も得て、（ご逝去に間に合わなかったが）10月末日に千葉大学附属図書館においてリポジトリ化してアクセスが容易になった。⁸齋藤晨二先生とは京都大学学部生時代の4回生の卒論発表会で初めてご挨拶

から35年。今自分自身の選択をどう振り返り、新しい時代状況をどう受け止めるのか。キムはそれを問う旅に出て、今は露、仏、に分かれて暮らす人々と対話を重ね、国家との関係、個人の勇氣とは何かを見つめていく。

(<https://www.nhk.or.jp/etv21c/update/2004/0228.html>)

⁸ 齋藤晨二編『シベリアへのまなざし：シベリア牧畜民の民族学的研究』平成5～7年度科学研究費補助金国際学術研究(学術調査)研究成果報告書（課題番号05041013）

名古屋市立大学人文学部 1996

ハンドル URL：<https://opac.ll.chiba-u.jp/da/curator/900121853/>

DOI:10.20776/900121853

させて頂き、以来時折であるが進路のご相談をして頂いてきた。特に外務省時代に当方から相談と称して名古屋市立大に赴いて、私の少なからず向こう見ずな進路変更の希望の表明に半ば呆れながらも付き合っていた。外務省時代はその私にとっての細いパイプのようなものを希望の火のように勝手に心に抱きつつ、過ごしていたように思う。その後外務省の退職後は、上記の科研費による調査プロジェクトにお誘い頂いたことが、現在につながるロシア、シベリアの先住民文化調査研究の契機となり、同時に礎となった。この出会いとお付き合い（していただいた、ということですが）がなければ、現在の私はなかった。

また、それより少し前になるが、2020年11月に、モスクワの母校ロシア科学アカデミー民族学・人類学研究所大学院での指導教官 Z.P.ソコロヴァ女史の逝去の知らせが入った。90歳が目前のことであった。特段健康状況の悪化の知らせを受けていたわけでもなく、コロナ禍以前に訪莫するときは必ずお会いしていただいていただけに、唐突な情報であった。そして2022年2月には、同研究所の大学院教務主任であった I.A.アメリカンツ女史の訃報を受けた。同研究所の大学院生たちにとって「院生の母」と呼ばれて親しまれた方だった。それぞれ違った立場からではあるが、モスクワで個人的に支えてくださったお二方には衷心よりお悔やみ申し上げます。

コロナ禍までは、大学の教員や研究会での研究者仲間と飲み会等を通じて時に密に相談したり意見を交わしたりする機会を得ることもあったが、コロナ禍でそれが全く失われてしまっているのはやはり残念である。コロナ禍で新たに開始されたオンラインによる授業法、会議や学会、研究会は、感染症という条件ではなくても今後多用されていく予感である。それは有用かつ有効なところは積極的に利用していくべき、という点で否定のしようがない。ただ人的な接触というのは人間社会において代替不可能なものであることも事実である。コロナ禍の鎮静化後は、再びそのような人的接触・交流の場が戻ってくることを望みたい。

(本当の)最後に25年間の千葉大学生活でお世話になった諸先生方、同僚の方々に御礼を述べてこの雑文の筆を擱きたい。1999年4月に千葉大学に就職し、大学という職場環境に初めて身を置いた当初は右も左も分からない経験であった。その中で、丁寧かつ辛抱をもって接して下さった荻原眞子先生、中川裕先生、半年遅れで普遍教育より文学部に転任されてきた田口善久先生、1999年3月に私と入れ替わりに退職されたが、時折授業後の飲み会に顔を出された金子亨先生、荻原眞子先生の後任の児玉香菜子先生といったユーラシア言語文化論講座の諸先生方には、専門分野の文化人類学や言語学、ユーラシア学、といった学問分野の魅力や教授法について、あるいは学生指導にお

齋藤晨二編『シベリアへのまなざしⅡ：シベリア狩猟・牧畜民の生き残り戦略の研究』平成9～11年度科学研究費補助金基盤研究(A)(2)研究成果報告書（課題番号09041028）

名古屋市立大学人文学部 2000

ハンドル URL : <https://opac.ll.chiba-u.jp/da/curator/900121854/OI:10.20776/900121854>

いての知識経験の全般にわたり、貴重な指導を頂いたり、ともに考えたりする機会を与えられた。
また側面から（時に正面から）教育・研究活動の支援をして頂いた事務局の職員の方々にも御礼を
申し上げたい。

（よしだ あつし・千葉大学大学院人文科学研究院）

〔退職後のメールアドレス：atsyoshida3105@gmail.com〕

Russia and Siberia for me: Some recollections

Atsushi YOSHIDA

I have been a member of the Course of Eurasian Languages and Cultures in the Faculty of Letters at Chiba University for exactly 25 years, a quarter of a century since April 1999, and I am retiring this spring. During this time, I have been blessed with good colleagues and students, and I will be retiring without any notable incidents.

Looking back, Russian and Siberian studies have been my life's work since my previous position as an official of the Ministry of Foreign Affairs, and I have been associated with them as a part of my life. Including eight years in Moscow and two years in Nakhodka in the Far East, I have done fieldwork in Siberia many times, and my experiences and memories overlap like strata and annual rings.

The most significant event of all was the collapse of the Soviet Union. Without it, I would not have conducted ethnographic research in Siberia, and I would not be in my current position. That is why the current political and social situation in Russia is so grave that it denies and betrays these trends and forces the world to view Russia's existence and value in a negative light.

Living experience with the reindeer herders of the Nenets, Evens, Evenki and Yukagirs, among whom I have been able to conduct direct field research, has been the most valuable of all. Their families provided us with the opportunity to eat and sleep in their homes and gave us a great source of academic and humane sustenance. I cannot express my gratitude to them enough. These indigenous peoples have overcome many changes in political and social conditions in the past, and they will be moving on to the next horizon again this time. I have little concern about that. They have such resilience embedded in themselves. What we are concerned about, however, is the alteration of the residential and livelihood environment by development activities.

More worrying is how the research environment will be maintained in the future due to university so-called reforms and/or reorganization within the faculty. We hope that our colleagues who will remain behind to support our Course will be able to hold their ground there.